

流行歌の調性と経済動向の相関性

An interrelation between the key of popular song and economic trends

1W090135-4 加藤洋輔
KATO Yosuke

指導教員：菅野 由弘 教授
Prof. KANNO Yoshihiro

概要：本研究は、日本のヒット曲の調性を年代ごとに調査し、それらの傾向を社会的背景の変遷と照らし合わせることによって、時代を映す“鏡”としての流行歌のあり方を考察したものである。具体的には、オリコンの歴代年間シングルヒットチャート上位 30 位の曲の調を集計し、経済成長率（実質 GDP の対前年度増減率）の推移や年代ごとの世相と比較してその相関性について考察した。その結果、「景気が安定しているときには暗く不安定な響きの短音階も許容され、景気が不安定になるにつれて明るく前向きな長音階を求めるようになる」「ヒット曲の調性の推移における変化は、景気動向に先行して表れることが多い」「比較的規模の大きな社会変動はヒット曲の調性に影響を及ぼしやすい」という 3 点を実証した。

キーワード：流行歌、調性、社会的背景

Keywords : a popular song, key, social background

1. はじめに

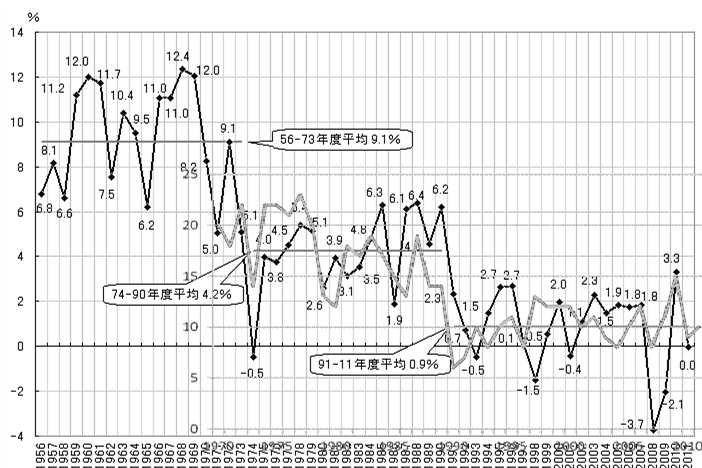
人間の心理と音楽との関係性は長年多側面から研究がなされてきた分野であり、その繋がりには徐々に紐解かれつつある。本論文では、対象を個人の心理から大衆へと広げ、社会心理と流行歌の調性との関係性に着目する。「NHK 紅白歌合戦」や「輝！日本レコード大賞」といった番組もあるように、日本におけるヒット曲はその年・時代を象徴する存在として認知されることが多い。そこで今回は、「日本のヒット曲が年代ごとの世相を反映しているのではないか」というテーマについて、“調性”に焦点を置いて論じていく。

2. 研究方法

1968 年～2011 年の年間シングルヒットチャート上位 30 位にランクインした合計 1320 曲のうち、メロレー形式の曲・音源の見つからなかった曲を除いた 1317 曲の調性を調査し、1970 年代前半～2000 年代後半という 5 年ごと・8 つの時期に区切って集計しグラフ化した(ここでは割愛)。曲中で転調する曲に関しては、1 番のサビ等、楽曲のメインとなる部分の調をその曲の調とすることにした。また、1 年ごとに短調の曲数を

集計し、その値の推移と経済成長率の推移を比較するグラフも作成した。

3. 結果と考察



【グラフ：短調の曲数推移(グレー)と経済成長率の推移(黒)の相関】

まず、経済成長率の推移と短調の曲数推移との相関性の有無について考察する。異なる 2 つの変数の相関関係を示す指標としてここでは、相関係数を用いることとする。相関係数とは 2 つの変数の相関関係を示す

指標である。相関係数は必ず-1~1の範囲に収まり、数値が正であれば正の相関、負であれば負の相関があることを示す。0.5以上であればかなりの相関があると言える。

グラフでは短調の曲数推移のグラフを1年遅らせて重ね合わせているが、最も相関を得られる重ね方を検証するために、遅らせない場合・1年遅らせた場合・2年遅らせた場合の3通りのケースについて相関係数を求め、比較することにした。結果は以下の表の通りである。

遅らせない場合	0.561358
1年遅らせた場合	0.705477
2年遅らせた場合	0.584617

よって、短調の曲数推移のグラフを1年遅らせた場合において一番強い相関があり、またその際の数値が2つのグラフに“正の強い相関がある”ことを示すということが分かった。

経済成長率のグラフは1973年頃、1990年頃を境目として大きく「高度経済成長期」「安定成長期」「低成長期」と3段階に分けることが出来、それぞれの境目において急激に下がる階段状のグラフになっている。短調の曲数推移のグラフを見ると、こちらも1990年を境に一気に下がる階段状になっており、長期的な社会心理を大きく反映したものと思われる。また、経済成長率が一時大きく下がっている箇所では短調の曲数も減少しているケースが多く、瞬間的な景気変動も影響を及ぼしているということが分かる。

以上のことから、グラフの相関に関して次の3点の解釈が成立する。

- ・景気が比較的安定しているときには暗く不安定な響きの短音階も許容され、景気が不安定になるにつれて明るく前向きな長音階を求めるようになる。
- ・短調の曲数推移のグラフにおける特徴は、景気動向に先行して表れることが多い。

- ・比較的規模の大きな社会変動はヒット曲の調性に影響を及ぼしやすい。

また、グラフを細かく見ていくと最近になるにつれて相関の度合いが小さくなっているように見てとれるが、その理由として大きく2つの要因を予想した。

- ・長調/短調の判別しづらい曲の増加

時代を経るにつれてポピュラー音楽のコード進行やアレンジは複雑化し、曲中に何度か転調をする、頻繁に短調と長調が入れ替わる、メロディが主音で終わらない等、調が判別しづらい曲が増加していることが一因であると考えた。

- ・音楽と社会との乖離

近年CD不況と言われ続け、ヒットチャートが大衆の好みを如実に表しているとは必ずしも言えなくなっているのが現状である。

4. 総括

ここまで「日本のヒット曲が年代ごとの世相を反映しているのではないか」というテーマについて論じてきたが、人々に好まれる曲の調性の傾向はやはり社会の変動の影響を受けて変化していくものであると結論づけられる。

グラフにおいて注目したいのが、1990年以降少しずつではあるが短調の曲が増えてきているということである。経済活動は幾つかのスパンで長期的なサイクルを描いていると言われているが、同じように日本のヒット曲もこれから短調主流へと回帰していくのではないだろうか、という見方も出来る。

また同じ短調でも1970年代は比較的暗い曲調が、2000年代は明るい曲調のものが多。今後においても、音楽の“調”が持つイメージが大きく変化していくという可能性も考えられる。もちろんこれらはあくまで推測に過ぎないが、これから日本の景気が回復していった場合、数年後、あるいは数十年後にヒット曲の調性がどのように変化していくのか非常に興味深い。